

Vol. XX, No. 1.

January 1944

植物研究雑誌

THE JOURNAL OF JAPANESE BOTANY

第二十卷 第一號 (通卷第二百九號) 昭和十九年一月發行

結網植物記 (第一)

牧野富太郎

Tomitarô MAKINO: Plantae Miscellaneae Makinoanae (I).

2603 (1943)

るりみのきトハ何レヲ謂フノ乎

我邦デ從来るりみのき一名るりだま一名るりだまのきト謂フノハあかね科ノ *Lasianthus satsumensis* MATSUM. (= *Mephitidia satsumensis* NAKAI) ノ和名デアル、故ニ之レヲさつまるりみのきト呼ブノハ全ク不要ニ歸スル、此種ハ蓋シ *L. japonica* Miq. var. *satsumensis* (MATSUM.) MAKINO ト改訂スルノガ至當デアルト私ハ確信スルノデ、茲ニ其學名ノ變更ヲ敢行シタ

同屬中ノ *L. japonica* Miq. (= *Mephitidia japonica* NAKAI) ハ宜シクほそばるりみのき一名ほそばるりだまのき(共ニ新稱)ト稱フベキ者デ、之レヲるりみのき一名るりだまのきノ學名ト爲ルノハ非デアル

るりみのきハるりだまト謂フノガ最初ノ名デ、るりみのきト呼ブノハ其次ギニ出來タ名デアル、故ニ是レハ第一るりだま 第二るりだま 第三るりみのきト次第スペキモノデアル

るりだまノ名ハ始メテ源伴存(畔田翠山)ノ『熊野物産初志』卷ノ一ニ圖入リテ出テキルガ、其文ハ

ルリダマ 大高山及玉置山南麓和州紀州堺島津竹筒王置口山谷ニ多シ高サ五六尺莖綠色ニシテ釣藤ノ如シ葉釣藤ニ似テ微ニ皺文アリテ深綠色節ニ兩對シ鋸齒ナシ葉背色淺シ夏梢ノ葉之間ニ花ヲ開實ヲ結フ初綠色大サ落葵子ノ如シ秋ニ至テ碧黑色甚美也葉四時不凋莖微ニ方也

デアル

次デ其後此レニるりみのきノ名が附ケラレタガ、是レハ蓋シ明治初期ヨリノ植物學者田代安定氏(薩州出身)ノ命名デアラウト思フ、何ントナラバ同氏

ノ親シク書イタ草稿本ニ始メテ此名ガ見エテキルカラデアル

明治二十六年ニ至テ矢田部良吉博士ハ之レヲ其著『日本植物圖解』第一冊第三號ニ於テ圖説シタ、無論其るりみのきノ和名ハ正シイガ、然カシ其學名ノ *Lasianthus japonica* Miq. ハ間違ツテキル

るりだまのきハ紀伊、四國ノ土佐並ニ九州ノ薩摩ナドニ産シテ淺山ノ林中ニ生ズル常綠灌木デ直立シ、上部ニ殆ンド平開セル枝椏ヲ分ツテキル

L. japonica Miq. ハ其葉ヲザツト見レバ先ヅ無毛ダガ、然カシ精密ニ觀察スル時ハ葉柄並ニ葉裏ノ脈上ニ稀薄ニ毛ヲ有シ絶對ニ無毛デアルトハ言ヘナイ、又芽ニハ毛が多い、又葉ノ上面デハ生葉ニ在テハ其葉脈ガ餘リ凹溝ヲ成シテキナイガ、然カシ支脈ノ粗密並ニ彎曲ノ具合ナドハ全ク *L. satsumensis* MATSUM. (即チ *L. japonica* Miq. var. *satsumensis* MAKINO) ト何等少シモ變ツテキナク、又花モ實モ其木ノ生エ場處モ全ク同一デアル、畢竟此二品ハ唯一種ノ者デ其一方ガ單ニ其一變種ト成ツテキルニ過ギナイ。此兩品ノ材料ヲ送ラレタ山脇哲臣君ニ感謝ノ意ヲ表スル。

たいさんぼくハ大蓋木デアル

たいさんぼくハもくれん科ノ常綠樹 *Magnolia grandiflora* L. ノ和名デアル。元來此花木ハ北米ノ原產デアルガ明治初年ニ我邦ニ渡來シ、通常人家ノ庭園ニ栽植セラレ、其強壯厚質大形ナ常綠葉ノ重々シク繁レル葉間ニ佳香ヲ放ツ雪白ノ大花ガ開クノデ葉ト共ニ賞用セラレ、處ニヨルト年古リテ頗ル大樹ト成テキルノヲ見掛ル事ガアル。

扱之レヲたいさんぼくト云フノハ如何ナル理由ニ由ルノ乎其レハ何ノ書物ニモ其説明ハナイ、文字ハ或ハ大山木トモ書キ或ハ泰山木トモ書イテアレド然カシサウ書ク理由モ何等記シテナイ、ガツマリ此大山木モ又泰山木モ單ニたいさんぼくへ對シテノ當テ字デ別ニ何ノ意味モ根據モ無イノデアル。

乃コデ私ノ考フル所デハ是レハ大蓋木ノ意デ、其レハ其花ガ大蓋ノ形ヲ成シテキル所ヨリ扱コソスク稱シタモノデアルト信ズル。

今其理由ヲ明カニセンガ爲メニ次ノ文章ヲ、彼ノ伊藤伊兵衛ノ『廣益地錦抄』卷之一カラ抄出シテ見ヤウ

らんかうぼく カシハ
蘭香木 葉は柏の葉のかたち極て青く冬落葉ス春出ると共につぼみを出し

トモ
四月にひらく花のかたち大蓋の表のごとくにて白しその香蘭花よりをと
ダイサン ラモテ
たかく遠く薰園中に植べき木なり秋實ありふさばたんのごとくにく
クンズエンチウ

りて色くれない又ながめあり

此ノ蘭香木トハ即チはくもくれん (*Magnolia denudata* DESR.) ノ事デ、其開イタ花ガ宛カモ大キナ蓋ニ似テキルノデ其レデ「大蓋の表のごとく」ト書イテアル、表トハ其蓋ノ

上面ヲ指シタモノデアル

惟フニ明治初年頃ノ誰レ乎園藝關係者ガ上ノ蘭香木ノ文ヲ讀ンデ其大蓋ノ語ニ着目シ、其レヲ其はくもくれん花ト殆ンド同様同趣同質同色ナ花ヲ開ク *Magnolia grandiflora* L. ニ移シテ扱コソ之ヲ大蓋木即チたいさんぼくト呼ンダモノデアラ

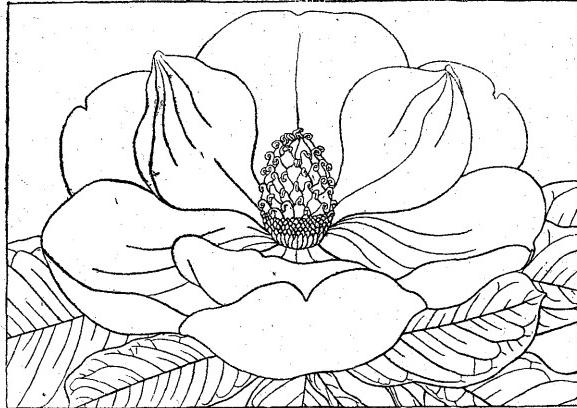
ウ、然カシ初メテ其レヲサウ呼ンダ其人ハ誰レデアツタ乎今分ラナイノハ遺憾デアル

此考察ガ果シテ中ツテキルトスレバ從來絶テ明カラザリシたいさんぼくノ文字ト其意味トガ此ニ始メテ判然トスル次第デアル

たいさんぼくヲ伊藤圭介、賀來飛霞ノ兩氏ハ『小石川植物園草木圖說』ニ於テ『植物名實圖考』ニ出テキル優曇花ニ充テ、キルガ其レハ無論誤リデ、此優曇花ハ蓋シ支那ノ奥地ニ在ル常綠喬木ナル木蘭(今庭園ニ植エテアルもくれんヲ木蘭トスルノハ誤リデ是レハ疑モナク辛夷デアル、從テ辛夷ヲこぶしぐトスル從來ノ說ハ間違ツテ居リコブシニハ敢テ漢名ハナイ)ト同物乎或ハ其近縁者デハナイ乎ト想像スル

八角茴香

八角茴香ハ又一ニ大茴香トモ船茴香トモ稱ペル、ソシテ此植物ハ我ガしきみト同屬デ其學名ハ *Illicium verum* HOOK. FIL. デアル、此處ニ 1888 即チ我が明治廿一年ニ HOOKER 氏ニ由テ用意セラレタ圖ヲ掲ゲテ其形狀ヲ明ニスル、今其莖狀ヲ成セル花ノ色ヲ見ルニ萼片ハ淡綠色デ邊緣ニ紫暈ヲ帶ビ、花瓣



たいさんぼく (*Magnolia grandiflora* L.)

(小石川植物園草木圖說ヨリ繪寫)

ハ外ト萼片ニ擁セラレ
テ濃紅紫ヲ呈シテキ
ル、此八角茴香ハ南支
那廣西省デノ原產デ固
ヨリ我ガ日本ニハ產シ
ナイ、又今日ニ至ルモ
尙其生本ハ渡來シテキ
ナイガ、是レハ早晚其
苗ガ輸入セラレテ親シ
ク我邦デモ見ルヲ得ベ
キニ至ルデアラウ。

私ハ此八角茴香ニ
對シテ試ニ *Illicium*
stellatum MAKINOノ新
考學名ヲ設ケテ見タイ
ト思フ、即チ是レハ古
昔ノ由緒アル古典名ノ
Anisum stellatum = 基
イタ者デアツテ、俗ニ
之レヲ Stern-Anis ト
モ Star-Anise トモ稱

ヘラレル、今次ニ其名
稱ヲ整理シテ見ヤウ



八角茴香(大茴香) *Illicium verum* HOOK. F.
全圖(HOOKER) 生ノ果實(WARBURG) 乾ケル果實
(WETTSTEIN) 心皮ノ一(BERG) 種子、下ニツ(BERG)
同、上ツ(WARBURG)

Illicium stellatum MAKINO, nom. nov.

= *Anisum stellatum*, nom. antiqu.

= *Illicium anisatum* L. pro parte

= *Illicium anisatum* LOUR. non L.

= *Illicium verum* HOOK. FIL.

Nom. vulg. Stern-Anis, Star-Anise.

Nom. Chin. 八角茴香、大茴香、舶茴香

Nom. Jap. Tô-sikimi, Uikyô-sikimi, Nioi-sikimi.

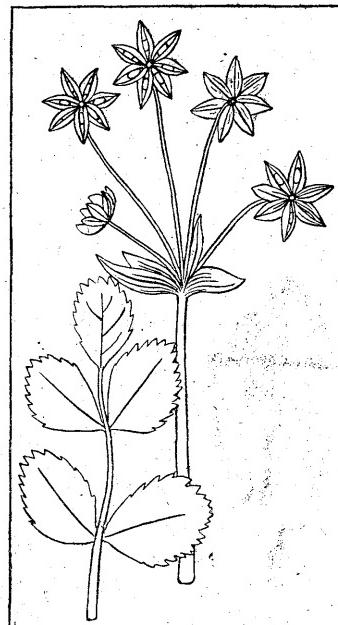
此ノ和名ノ唐しきみたきハ以前之レニ命ジタ者ノ様ニ思フガ、茴香うきやうしみき並ニ
香ほひしきみしきみハ今其一名トシテ更ニ名ケテ見タ者デアル

上ノ八角茴香即チ Stern-Anis =就テ面白イ事ハ、昔ノ西洋古典ノ圖=就テ
マアル。始メ此乾イテ車輻狀ヲ呈セル實ノミガ先ツ支那カラ歐洲へ行ツタ時、
歐洲ノ學者ハ其實ノ放ツ香ヒニ由ツテ其レヲ Anis (からかさばな科ノ草本デ
地中海地方ニ產スル *Pimpinella Anisum* L. デアル、ゾシテ其果實ヲ Aniseed
ト呼ビ香料ニ用ウル) ノ一種ト考ヘタノデ、
乃コデ今此處ニ出セル様ナ奇想天外ヨリ來
ル的ナ想像圖ヲ作ツテ之レヲ Stern-Anis
ノ草ト做シ *Anisum stellatum* ト名ケテ其當
時 (一千七百年代) ノ書物ニ掲ゲタモソ、
即チ圖ニ見ル様ニ其車輻狀ノ實ヲシテ一個
ヅ、繖梗、頂端ニ着生セシメテからかさば
な科 (繖形科) ノ一新植物ヲ組ミ建テ、其
葉ヲ羽狀ニ描キサモ *Anisum* 類ノ者ラシ
ク工夫シテ其レニ伴ハセテキル、其レハ
Anis (Anise) ガからかさばな科植物ニエ
此 Stern-Anis (Star-Anise) モ亦同様ニ同
科品ト思ツタ結果デアル

我邦ノ書物デハ J. W. WEINMANN 氏ノ
Phytanthoza-iconographia カラ書寫シタ着
色圖ガ岩崎灌園ノ『本草圖譜』卷ノ四十四
ニ載セラレテ八角茴香ト署シ、之レヲ蘭
香 (即チ茴香うきやうノ事) ノ一種トナ
シ次ノ様ニ述ベテアル

時珍自番舶來者 實大如柏實裂成八瓣

一瓣一核大如豆黃褐色有仁味更甜俗呼舶茴香又曰八角茴香といふものは
本邦にも番舶來の實あり形狀茅草の實に異ならず然れども香氣ありて食
用に供せず又物印忙に載る所のアニシュム。ステルラチュムといふ物舶茴
香なり草本ニシテ一莖五葉うまぜりに似て圓く淺き鋸齒あり外本草の書
並に醫學書等には八角茴香を以て大茴香とし時珍説ところの大茴香を小
茴香とす恐くは非ならん形狀同じからず但效相等し小茴香は次の條の蔴



八角茴香 Stern-Anis 即チ *Anisum stellatum*, Badian (WEINMANN
ノ *Phytanthoza-iconographia*
ヨリ模寫ス)

蘿なり本草匯に形如柏實裂成八瓣者爲大茴香性熱損目不可入食料といへり

しょめーるノ百科辭書ヲ抄譯シタ『厚生新論』ニハ下ノ如ク書イテアル（昭和十二年ノ版行書＝據ル）

八角茴香

羅甸アニシュム・ステルラチュム」バニアニ」シンギ」和蘭ステル・

アネース」シネース・アネース」シネース・ヘンケル

東方諸國より齎し来る所、木に生ずる子實なり。支那、韃靼、非力
昆泥泄諸島印度海に散在する大小數島の總名其他諸所に產す。これを「ステルアネイス」と名く。是は其狀星象の中心より七八支尖を分ち出せるものごとく、且其香味ともに「アネイス」と全く同じきの故なり。〔牧野云フ、此厚生新論ノ活字本デハ其振假名ガ平假名ニナツテキルガ是レハ其出版者ガ今日此頃ノ流行ニ從ガツタノデアラフ、私ハ未ダ其原稿本ヲ見テヰナイカラ何ントモ言ヘナイガ其當時ノ書キ振リニ徵スレバドウモサウ感ズル、ガ是レハ其稿本ヲ見レバ直グ判カル譯ダ、又其句切リノモ。モ多分其原稿本ニハ無イデハナイ乎ト思フ、吾等ノ希望スル所ハ此ノ如キ稿本ヲ版ニスル場合ハ其假名ハ必ズ原本通りトシ又原本ニ句點ガ無ケレバ其レモ其通リニスル事デ畢竟ハ忠實ニ原本ヲ守テ後ノ人ガ勝手ナ細工ヲセヌ事デアル、即チ是レガ其原著ヲ尊重スル所以ダ

宇田川榛齋譯述、同榕菴校補ノ『新訂増補和蘭藥鏡』第十四ニハ角茴香ガ載セラレテキテ之レヲ「アニシュム・インデキム・ステルラチュム」羅「ステルアネイス」蘭ト署シ「此樹三種アリ」ト記シテ其第一種ヲしきみ、其第二種ヲ藥用ノ角茴香、其第三種ヲ北亞墨利加花地フヨリダノ產品トシテアル、即チ此第二種ノ藥用角茴香ガ八角茴香ニ當ルガ、然カシ花ノ記述ハ全ク不正デ其狀我ガしきみト同ジデアル、此時代デハ未ダ八角茴香ノ花ハ世界ノ學者ニハ分ツテキナクテ妄リニ八茴香ノ花ハ其樹ト共ニ我ガしきみデアルト誤解シテキタ、ソシテ此誤解ハ其八角茴香ノ眞物ノ花葉狀態ガ HOOKER 氏ニ由テ發表セラレルマデ續イタ、即チ其發表ハ今カラ五十五年前デアル

上ノ記事ニ據レバ今カラ約百七十年前後ニ於ケル洋人ノ八角茴香ニ對スル舊イ知識ノ程度ガ窺ハレテ興味ガアル

りんね氏ノ名ケタ *Illicium anisatum* L. ナル學者ノ基本植物ハ上ノ八角茴香 (*Anisum stellatum*) ノ果實ノ實物ト、KAEMPFER 氏ノ著 *Amoenitarum Exoticarum* (1712) 所載ノ我ガしきみノ圖ト記事トニ據タモノデアル、即チ此

ノりんね氏ノ學名ハ上ノ兩 species ノ合作ニ由テ出來タモノデアルカラ之レヲ無條件ニ我ガしきみニ專用スル事ハ出來ナイ筈デアル（pro parte 附キナラ許セナイデモナイガ）、故ニ私ハ此理由カラ我ガしきみニ對シテハ止ムヲ得ズ *Illicium religiosum* SIEB. et ZUCC. ヲ用ウルコトニシテキル、りんね氏ハ其命名當時未ダ我ガしきみノ實物ハ見テキナク單其圖ノミヲ見テキタニ過ギナカツタ、故ニ同氏ハ *Planta a me non visa, fide Kaempferi recepta* ト書イテキル。

其レカラ此ニ注意セネバナラン事ハ西洋ノ書物ノ鶴呑ミデアル、べんとれ一、とらいめん、けーれるナドノ諸氏、多分べるひ氏、しゅみと氏ノ書モサウデアラウガ、此等ノ書物デハしきみト大茴香（八角茴香）トガ混説セラレテ居リ、何レモ *Illicium anisatum* L. ノ學名下ニ我ガしきみノ圖ヲ掲ゲ、ソシテ Star-Anise ノ俗名ガ書イテアル、我邦人時ニ其攤ニ倣フテキルガ是レハ大ニ戒ムベキ事デアル、昭和二年東京帝國大學農學部附屬演習林刊行ノ『臺灣ニ生育スペキ熱帶林木調査』ニ出テキル大茴香（八角茴香、角茴香）モ無論何カノ洋書カラ轉寫シタモノデアラウガ少クモ其果實ヲ除イテハ他ハ全クしきみノ圖デ大茴香ノ圖デハナイ

とらごけノ名ヲ認識スペキデアル

日本デ昔カラとらごけト謂テキルokeガアル、ソシテ其學名ヲ *Leucobryum scabrum* LAC. ト稱スル

今日ノ一般蘚學者ハ此既ニ嚴存セルとらごけノ名ヲ知ラナイノデ、乃コデ此レニとらのをおきなごけダノおほしらがごけダノ、新和名ヲ捨ヘテ書物ニ書イテキルガ、此等ノ名ハ全ク不要デ、是レハ昔カラ疾クニ稱ヘラレテ來タとらごけノ名ヲ以テ呼ブノガ至當デアラウ

とらごけノ名ハ早クモ小野蘭山ノ『本草綱目啓蒙』卷ノ十七土馬驥ノ條下ニ出テ居リ「一種白色ヲ帶テ莖直ナラズシテ獸尾ノ如クナル者ヲトロゴケト云」ト述ベテアル、岩崎灌園ノ『本草圖譜』卷ノ三十五ニとらごけノ圖ガアルガ其版本ノモノハ其彩色ガ間違ツテキル、又水谷豐文ノ『物品識名拾遺』ニモとらごけノ名ガ出テ居リ、又『本草藥名備考和訓鈔』ニモ「トロゴケ 土馬驥一種ハ葉ニ白ミ有テ先ノ方細尖リ杉ゴケニ似チ曲リ伏スルモノ也上賀茂社地ニ多シ」ト書イテアツテ昔カラ著名ナコケデアル事ハ此等多クノ書物ニ出テキルノデモ判カル、實際山地ニ入ツテ見テモ此コケハ特ニ目ニ着クカラ古人ガ早クモ書物ニ書キ載セタモ宜ベナル哉デアル。

新品淡路毛犬枇杷

兵庫縣西宮高等女學校々長山鳥吉五郎君ガ、去ル昭和十四年十一月ニ淡路ノ國ノ南端海邊ナル瀨村（三原郡）デ發見セラレ、あはぢけいねびはト新稱セラル、*Ficus* 屬ノ一種ガアソテ當時其標品ヲ私ニ送ラレタ、昨昭和十八年十

一月同君ハ再び同地ニ赴カレテ 其實着キノ小枝ヲ採集シ多數ニ之レヲ再送セラレタノデ、早速私ハ其レヲ精査シ乃チ詳細ナ寫生圖ト記載文トヲ作ツタ。ソシテ能ク能ク之レヲ稽ヘテ見ルト是レハいぬびはノ著シイ有毛變種デアル事ガ分ツタノデ次ノ通り其學名ヲ定メタ

Ficus erecta THUNB. var. *Yamadorii* MAKINO, nov. var.

F. Yamadorii MAKINO, in herb.

Similar to *F. erecta* THUNB., but the leaves branchlet and fig are pubescent, and pubes of the leaves are remaining permanently. In my specimens, the figs have the staminate flowers and many female gall flowers.

〔產地〕 淡路三原郡灘村（山鳥吉五郎）

〔和名〕 あはぢけいぬびは（山鳥吉五郎）

同地ニハ本種ガ唯一一本シカ見附カラナク、其レガ山畠ノ間ニ在テ農夫ガ毎年刈り込ムノデ其生存ガ誠ニ岌々乎トシテキル現状デアルトノ事デアル、ソシテはレハ蟲裏果ヲ有スル株デアルカラ雌花ハ皆短花柱アル子房ヲ有シ、胚ノアル果實ハ生ジナイ。故ニ種子ニ依ル繁殖ハ全ク不可能デアル

上ノ様ニシテハ見タガ、然カシ此レハ琉球等ニ產スル *Ficus Beecheyana* HOOK. et Arn. (= *F. erecta* var. *Beecheyana* KING) ト同種ト認定スペキ事ヲ見出シタカラ、此學名ヲ正稱トシ、上ノ私ノ名ヅケタ名稱ヲ其 synonym トシ、ソシテ其和名ハ既ニ在ルけいぬびはトスル事ニシタ。

からかさごけト呼ブ眞ノコケハ何レ乎

昔カラ日本ノ學者ガからかさごけト謂ヒ來ツテキルモノハ *Rhodobryum giganteum* PAR. デアル、即チ岩崎灌園ノ『本草圖譜』卷ノ三十五ニモ其ノ圖ガ出テキテからかさごけト書イテアル、又れんげごけノ名モ署シテアル

今日ノ蘚學者ハ皆一樣ニ其和名ノ適用ヲ誤テ、此元來ノからかさごけヲおほからかさごけト呼シキルノハ餘計ナ名デアル、是レハ其種名ガ巨大ナ意味ノ *giganteum* デアツテ且同屬中ノ *Rhodobryum roseum* LIMPR. ヲ縦マニニからかさごけト爲テキルノデ、ソレデ之レヲおほからかさごけト謂ツタノデアラウ

前述ノ様ニからかさごけ一名れんげごけガ *Rh. giganteum* PAR. ニ對スル從來カラノ本名デアルカラ之レヲ更ニおほからかさごけナドモ云フ必要ハナイ

今日ノ様ニ *Rhodobryum roseum* LIMPR. ヲからかさごけト謂フノハ惡ルク、此誤稱ハ斷然廢スペキデアツテ其理由ハ自ラ明白デアラウ、由テ私ハ曾テ其レニひめからかさごけノ名ヲ與ヘタ事ガアル、人ニヨリ之レヲからかさごけト名ケテキルガ、是レハ一方ノからかさごけト混視セラル、恐レガアルカラ敢テ佳名トハ謂ヘナイ